

日本ミルトン協会第 11 回研究大会

研究発表資料

オンライン(Zoom)同時配信方式にて開催

日時：2020年12月12日(土)

オンライン開催に際して

○大会への参加方法

本大会は Zoom ミーティングにて開催されます。大会に参加するアドレスは、大会1週間前の12月5日と大会前日の12月11日13時頃に、メーリングリストを通じてお知らせします。

○メールアドレスご確認のお願い

事務局よりご連絡をする際に会員宛の一斉メールをお送りしていますが、これまでそのようなメールが届いていない先生方、葉書でのご連絡のみでメールアドレスを事務局にお知らせいただいていない先生方におかれましては、協会のアドレス john.milton アットマーク maj.gr.jp (アットマークを@に変えてください) までお知らせください。

12月5日13時頃に大会のアドレスを掲載した最初のメールお送りします。12月5日の間にメールが不着の場合には、大変お手数ですが、上記アドレスまでご連絡ください。

○研究発表のハンドアウト

研究発表のハンドアウトは、大会前日の12月11日13時頃に配信する、大会アドレスを記載したメールに添付するか、ダウンロードできるアドレスをお送りする予定です。当日も添付ファイルとして配布します。

○研究発表中

研究発表中はマイクとカメラをオフにさせていただきますようお願いいたします。質疑応答時、発表者と直接お話になる時はマイクと（可能であれば）カメラをオンにしてください。

○質疑応答

対面の研究発表と同じく、質疑応答は発表終了後に行います。直接質問をしていただいても、チャットに書き込んでいただいても構いません。

○総会資料

総会資料は、大会前日の12月11日13時頃に配信する、大会アドレスを記載したメールに添付するか、ダウンロードできるアドレスをお送りする予定です。当日も添付ファイルとして配布します。

日本ミルトン協会第 11 回研究大会プログラム

日時 2020 年 12 月 12 日 (土) 14 時 00 分より Zoom にて開催
本大会は **Zoom** により行われます。参加のアドレスは後日メールにてお送りいたします。

○ 委員会 (12:30~13:40)

○ 開会の辞 (14:00~14:05)

会長 富樫 剛

○ 研究発表 (1. 14:10~14:50 / 2. 15:00~15:40)

司会 渡辺 賢一郎

1. 宗教詩における「あなた」と「私」

西川 健誠

2. 稀覯本としての John Boydell 版 *The Poetical Works of John Milton*

加藤 遼子

○ 休憩 (15:40~15:50)

○ 総会 (15:50~16:20)

司会 富樫 剛

活動報告

笹川 渉

会計報告および予算審議

花田 太平

会計監査報告

金崎 八重・桶田 由衣

来年度大会・研究会予定

笹川 渉

その他

○ 閉会の辞 (16:20~16:25)

会長 富樫 剛

研究発表 1：宗教詩における「あなた」と「私」

西川 健誠（神戸市外国語大学）

神が人格神であるなら、それは信仰者から「あなた」と呼びかけられる存在たる事を意味する。とすれば宗教詩での「あなた」「私」という代名詞の用いられ方は、神と語り手との関係のインデクスとなろう。以下、ダン、ハーバート、ミルトンの作品中の「あなた」「私」の使われ方を考察したい。

ダンのソネット「私の心を強打し給え、三位一体の神よ」(“**Batter my heart, three-person'd God**”)では、自らの墮罪に絶望する「私」が、神に向かい、一方的かつ受動的に浄化される事を祈願する。この祈願の一方性は、14行中「私」という代名詞が14回、うち9回は目的格(**me**)で登場している事に現れている。ソネット中の各文の構造を見ても、「私」と「あなた」の二語が直説法の動詞を挟み、正常な主客の関係で並ぶ例はほぼない。ジャンル論的に見れば、男性から女性への一方的思いを語る器であったソネットが、信仰者から神への一方的な思いを伝える器に変化しているともいえる。

ダンのソネットが神たる「あなた」と信仰者の「私」の交わりの不成立を伝えるなら、ハーバートの「握手」(“**Clasping of Hands**”)は理想的な人神関係において実現する「私」と「あなた」の交わりを言祝ぐ。第一連ではキリストへの自我奉獻による信仰者の罪からの解放の教義が、第二連では、この解放の前提となるキリストの受肉・受難による自己放棄の教義が、語られる。こうしたいわば自我の「交換」による救済を語るにあたり、「交換」の概念が、「私 (のもの)」「あなた (のもの)」という二語の行中や脚韻部におけるキアズマ的=交差的配置を通じ、視覚化されている点が目を引く。

ミルトン『楽園喪失』第10巻914-936行では、「私にのみ(神の罰が下りますよう)」[935]「ひとえに神の罰を受けるのに相応しい私、この私」[936]という、イヴによる「私」の繰返しが見られる。この「私」の繰返しに、ある種の **egotism** をなすとは出来まい。だがこうした自己犠牲の文脈での「私」の繰返しは、第3巻、父なる神に、自らの受難による人間の贖罪を申し出る御子の言葉[236-7]にも現われていた。後にアダムとの和解、さらに神への改悛の祈りが続いている事を鑑みれば、イヴのアダムに向けての「私」の繰返しは、御子による「私」の繰返しを意識せざる内に範とした、夫婦間の、そして神人間の交わりの回復に連なる行為と解せないか。

神と人との交わりの不成立を語るか。両者の交わりの実現を言祝ぐか。伴侶への呼びかけが神への呼びかけと繋がるか。宗教詩における「あなた」「私」の用いられ方は、信仰者と神との関係の多様な姿を映し出す。

研究発表 2 :

稀覯本としての John Boydell 版 *The Poetical Works of John Milton*

加藤 遼子 (日本大学)

本発表では出版業者で版画家でもある John Boydell (1719–1804) による Milton 作品集 *The Poetical Works of John Milton and The Life of the Poet* (以下 Boydell 版とする。) に焦点を当て、出版された 18 世紀後半の英国社会における Milton 作品、特に *Paradise Lost* の受容や挿絵の社会的・文化的そして文学的な役割について、明らかにしていく。この Boydell 版は、Milton の没後 120 年である 1794 年を皮切りに、1795 年、1797 年と出版された 3 巻本で、*Paradise Lost* (1667) 他、初期の作品である ‘Il Penseroso’ (1631) から晩年の作品である *Paradise Regained*, *Samson Agonistes* (1671) までを網羅し、収録している。また、Boydell 版は版を重ねていくが、こうした書籍は英国の貴族を含む富裕層を購買対象としており、重版出来はすなわち英国において John Milton 作品がいかに根ざしているかを示すメルクマールとなるものだと考える。

Paradise Lost の挿絵としては、Jacob Tonson (1655–1736) による出版ではじめて挿絵が加えられたことが知られており、John B. de Medina (1659–1710) と Bernard Lens (1630–1707) によるデザインをそれぞれ Michael Burghers (1647–1727) と Peter P. Bouche (1659–1710) が銅版画の彫刻をほどこした。その後、John Martin (1789–1854) や Gustave Doré (1832–1883) をはじめ、複数の画家による挿絵が存在する。Boydell 版には Richard Westall (1765–1836) の挿絵が採用されている。18 世紀後半は、イギリス絵画界の大きな変革期であり、その中心は教会に飾られている歴史画や宗教画から本の挿絵へと需要が移行していった時代である。こうした歴史的、社会的な背景を踏まえながら Boydell 版を考察していく。